五島キリシタン史

伝来と信仰のあゆみ

堂崎教会

概要

世界では大航海時代の直中、フランシスコ・ザビエルが鹿児島へ上陸し、キリスト教が日本へ伝来します。その17年後、五島にもキリスト教が伝わりますが、幕府の禁教令などにより厳しい弾圧を受け一旦壊滅したといわれています。しかし、18世紀には大村領外海地区からの潜伏キリシタン農民が五島に移住し、再びキリシタンの灯がひっそりと宿るのです。その後もキリシタンへの弾圧は続きますが、1873年キリシタン禁制の高札撤去までその信仰を伝え続けます。それからは神父・信徒を中心に、教会堂が次々と建設されていきます。そして現在、世界でも稀な迫害の歴史を乗り越えた信徒たちの子孫たちにより、その信仰の証である教会堂は大切に守られているのです。

目次

キリスト教伝来から幕末まで

世界に開かれていた五島列島…… 2
五島へのキリスト教の伝来…… 3
最初の大きな受難－二十六聖人殉教…… 5
五島でも始まるキリシタン弾圧…… 6
大村領外海からの移住…… 7
（コラム：大村領から五島への農民移住の背景）…… 8
幕末期までの五島の潜伏キリシタン…… 9
（コラム：カクレキリシタン）…… 10

明治から現代へ

キリシタンの復活、信徒発見の奇跡…… 11
復活後の迫害（崩れ）、牢屋の窄事件…… 12
カトリックの再布教から現代へ…… 13
（コラム：教会堂建設の匠 鉄川与助）…… 14
（コラム：堂崎［その歴史と神父たちが残した福祉の足跡］）…… 15
五島を世界遺産の島に！…… 16
年表…… 17
参考文献…… 22

キリシタン用語 イエズス会 1540年にローマ教皇の公認を受けた修道会で、スペイン人のフランシスコ・ザビエルやイグナ

キリスト教伝来から幕末まで

【世界に開かれていた五島列島】

五島列島は古代、遣唐使船が寄港する島々として日本と大陸を結ぶ重要な交易・往来の中継基地として利用されていました。12世紀に平清盛による正式な日宋貿易が確立されると、福江島の南部の大浜遺跡にみられるように多くの貿易陶磁器が流入してきます。このことは、五島が日本と大陸との貿易ルートで重要な位置を占めるようになってきたことを表します。

中世の五島列島は、14世紀ごろから倭寇、東シナ海周辺海域（主に朝鮮半島、中国沿岸部）で半商半海賊的な動きをおこなう集団の拠点でした。その後、将軍足利義満による勘合貿易という正式な日明貿易が開始されると、倭寇は終息し、正式に五島が交易上重要な寄港地になります。15世紀になり、明の海禁（鎖国）政策によって、私的貿易がふたたび盛んになります。

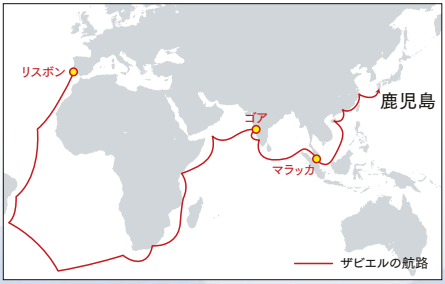
一方ヨーロッパでは14世紀にルネサンス時代を迎え、三大発明と呼ばれる羅針盤・活版印刷・火薬が登場し天文学や地理学も発達します。次に来る大航海時代は、羅針盤と航海技術の向上などによりもたらされることとなります。これは、13世紀末まで強大なオスマン・トルコ帝国のため、陸路を通っての布教が難しかったキリスト教宣教師たちが、海路で世界へ進出するきっかけとなりました。また活版印刷は、聖書などの出版を可能にします。大航海時代が始まると、当時の強国ポルトガルやスペインは、香辛料や金銀などを求め、大西洋やインド洋を目指すとともに、宣教師たちは世界への布教を試みるのです。特にポルトガルはバスコ・ダ・ガマによるインド航路の発見後、ゴアやマラッカを拠点に置き、アジアとの交易システムを確立していきます。1540年、明の商人王直が福江島に来航し、宇久領主の許可により、江川城下に拠点を設けました。市指定史跡の明人堂や六角井戸は彼ら明の商人に関わる遺跡だと考えられています。王直は、1543年の鉄砲伝来にも関わる人物といわれており、王直の船に同乗していたポルトガル人が種子島で鉄砲を伝えたといわれています。

このように、王直などの私的国際貿易商人が築いた海上ネットワークやルート

チオ・デ・ロヨラによって世界への宣教を目的とし1534年に結成された。

が、当時大航海時代の直中にあり大西洋やインド洋への進出を競う西洋と、日本との接触の起点になりました。そして、キリスト教は西洋文化とともに、このような海上ルートの拠点でもあった五島に伝来することになるのです。

のちに伝えられるキリスト教は、まだ危険であった大航海をものともせず、世界への布教に命をかけた宣教師たちの尊い信仰心に支えられたものでした。宣教師たちはキリスト教の布教のみならず医学や天文学などの西洋文化を世界へ伝えます。こうして海上ルートの拠点でもあった五島にキリスト教が伝来することになりますが、初めて五島とキリスト教宣教師が接触したのは、宣教師たちが持ち込んだ西洋医学に助けを求めたことがきっかけでした。



【五島へのキリスト教の伝来】

1549年に鹿児島から始まったカトリック修道会のイエズス会宣教師のフランシスコ・ザビエルによるキリスト教布教は急速に西日本で広まりました。1550年ザビエルは平戸にて布教を始め、現在の長崎県地域でのキリシタン文化幕開けとなります。その後、1563年には大村領主大村純忠が横瀬浦（現在の西海市）で洗礼を受け、最初のキリシタン大名が誕生しました。1571年には当時大村領であった長崎を開港し、1580年には長崎と茂木をイエズス会へと寄進。多くの教会が建てられた町並みは「小ローマ」と称されるほどでした。この頃、大村領民のほとんどがカトリックへ改宗しています。現在の五島のカトリックやカクレキリシタンの信徒の先祖のほとんどは、後にこの大村領からやってくるのです。五島にキリスト教が伝わったのは1566年です。ザビエルが日本に初めてキリスト教を伝えた17年後のことでした。当時五島の領主であった第18代宇久純定（すみさだ）は病気になったため、大村領の横瀬浦で宣教活動をしていたトーレス神父のもとへ、西洋人医師

3 **キリシタン用語** **イルマン** 宣教師の称号のひとつで、貞潔・清貧・従順を約束して神に一生を捧げる修道士のこと。

キリシタン史に関する五島の領主系図

- 1549年～第18代 宇久純定（うくすみさだ） 1566年に宣教師を招き、五島へのキリシタン伝来のきっかけを作る。
- 1571年～第19代 宇久純尭（うくすみたか） キリシタンの洗礼を受け、布教につとめる。
- 1586年～第20代 五島純玄（ごとうすみはる） 1592年姓を五島に改める。キリシタンを排斥。
- 1594年～第21代 五島玄雅（ごとうはるまさ） キリシタンを保護するが後に棄教。
- 1612年～第22代 五島盛利（ごとうもりとし） キリシタンを弾圧。
- 1769年～第28代 五島盛運（ごとうもりゆき） 大村藩からの農民移住政策を実現する。

の派遣を要請しました。（一説には息子の病気を治療するためでもあったと言われています。）これが、五島とカトリックの最初の接触でした。つまり、カトリックへの興味ではなく西洋医療による治療を求めたことが、五島にカトリックが伝来するきっかけになったということです。今度は純定自身が病にかかり再び医師の派遣を要請すると、1562年日本人医師ディエゴが派遣され治療を受けます。そして1566年修道士アルメイダと日本人伝道士ロレンソは島原半島の口ノ津から船出し、海路で福田（現在の長崎市）を経由、8日間かけて、五島灘を渡り、大値賀（福江島）の江川港に入りました。アルメイダの投薬などの治療により純定の熱病が治ると信用が一気に高まり、以後、布教は順調にすすむこととなり、すぐに純定の配下の武士25人が洗礼を受けることになりました。

同年、アルメイダを迎えた奥浦地区の村人は、日に2回の教理学習をし、およそ120名が洗礼を受けました。信者らは、早速教会を建てたいと領主に許可を願うと、自分の別荘を移して教会を建てることを許し、配下の武士24名と100名ほどの職人を派遣して教会を建てました。その位置は現在の奥浦字寺屋敷の栄林寺付近と考えられています。

その後、アルメイダの後任としてパブチスタ・モンテ神父が同年5月に豊後（現在の大分県）から来島、奥浦地区で初めてクリスマスのミサがおこなわれました。翌1567年、純定の二男純尭（すみたか）は早速、モンテ神父から洗礼を授かり、霊名をドン・ルイスと称しました。後に19代領主を継いだ純尭は、熱心なカトリックの信仰

者で、江川城下に教会用地を提供し聖堂を建て、さらに布教に努めました。当時、領内に信者が2000名以上いたともいわれています。

しかし、1579年ドン・ルイス宇久純尭が35歳で病死すると、跡目相続をめぐる紛争がおこります。純尭の弟（大浜）玄雅（はるまさ）と純尭の兄の子で純玄(すみはる)が家督を争い、支援勢力がキリシタン嫌いであった純玄が後を継いだため、その直後にキリシタン迫害は開始されました。キリシタンの玄雅は、キリシタンである武士200名とともにこの迫害に対抗しましたが敗れ、長崎に逃れ現在の長崎市五島町に住みました。その後、玄雅は7年余りの亡命生活ののち、薩摩（鹿児島）の島津義久の仲介を得て五島に帰りました。

その間、1591年には大村、有馬（南島原）の教会が閉鎖され、五島の教会も閉鎖されていきました。そして、純玄が朝鮮出兵に出陣して（このとき宇久姓を五島姓に改める）、陣中で病没すると、1594年、五島（大浜）玄雅があとを継いで21代領主となり、領内のキリシタンの置かれる状況がよくなりました。その後、２人のイエズス会士が来島し、1500人余りが洗礼を受けました。

【最初の大きな受難－二十六聖人殉教】

1587年豊臣秀吉によるバテレン禁止令、続いて江戸幕府による禁教令で、キリシタンは厳しい時代に入っていきます。1597年宣教師や修道士ら26人を長崎西坂の丘で処刑します。これが長崎二十六聖人殉教事件です。京都などに住む宣教師などを長崎まで見せしめに歩かせ、長崎で処刑するという事件でした。この事件では、五島出身で19歳のヨハネ五島、神父らフランシスコ会宣教師６名、パウロ三木らイエズス会員３名、その他信徒17名が殉教しました。ヨハネ五島は大阪で捕らえられ、長崎に着いた後、処刑直前にイエズス会修道士となって刑を受けました。

五島では、小ルイスの霊名を持つ領主玄雅が、長崎での二十六聖人殉教事件があったにもかかわらず、1599～1606年に宣教師を五島に招いています。とくに1605年には、宣教師を城内に留め保護しました。信徒は増えつづけ、1606年には2300人を超えたといわれています。1607年には、城下に教会堂の建設を許可し、神

キリシタン用語 **潜伏キリシタン** 禁教時代に、表向きは仏寺の檀家となりながら、キリスト教の信仰を保持・継承した人々。

ヨハネ五島

西坂の丘で殉教したヨハネ五島を含む26人は、1862年ローマ教皇ピオ９世により聖人に列せられました。

父の居住を許可しました。

【五島でも始まるキリシタン弾圧】

しかし、五島でも第22代藩主五島盛利によって徐々に禁教政策が進められます。1614年、徳川家康のキリシタン禁制令にしたがい盛利は領内のキリシタンを追放しました。1617年には禁教下に密かに司牧したマシャド神父が上五島の鹿ノ子で捕縛され、大村で殉教しました。弾圧は強化されていきますが、五島領で弾圧の本格化が10年ほど遅れたのは、有力な家臣であった有川氏や青方氏がキリシタンであったことや江川城の火災からの復旧、領主権相続をめぐるお家騒動（大浜主水事件）などが原因であると考えられています。1628年には、五島家家老貞方勝右衛門、松尾九郎右衛門が領内に「制札」という禁止を表す立て札を設置し、キリシタンの入島禁止が徹底されました。

1637年にはキリシタンの多かった島原半島と天草で「島原・天草の乱」が起き、鎮圧後、幕府は一層取り締まりを強化していきます。仏寺へ強制的に所属させる寺請制度や絵踏を実施したほか、出島に住まわしていたポルトガル人を国外へ追放し、日本は鎖国の道へ突き進みます。1644年に小西マンショ神父が殉教したことにより、国内には神父が不在となり、以降、キリシタンは自ら信仰組織を維持し、潜伏しながら信仰を続けることになりました。

五島藩では1664年にはキリシタンではないことを証明する「宗門改め」の徹底の指示がされるなど弾圧はすすみます。以後、五島藩には寺社奉行２名がおかれ、「絵踏」を実施する巡回もおこなわれます。棄教者の子孫も「切支丹類族」として扱われ生死にわたり監視されました。このような政策により五島におけるキリシタンは、18世紀ころには信仰組織をふくめほぼ壊滅したと考えられています。

絵踏（長崎歴史文化博物館蔵）

【大村領外海からの移住】

五島藩（福江領）では享保年間（1716～1735年）以降、たびたび暴風や干ばつ、害虫被害による飢饉、疫病などで農民は減り、村が全滅するところさえあったといわれています。当時、五島藩としてはできるだけ農民数を増やして、農産物を増産し税収をあげることが何よりも優先すべきことであったと考えられています。一方大村藩では厳しい人口抑制策がとられており、同時に潜伏キリシタンの追放も課題でした。この両藩の利害が一致し、「千人貰い」という大村藩の農民を1000人五島藩へ農業活性化のために移住させる約束が1796年に結ばれます。この約束による移住者のほとんどは、潜伏キリシタンだったといわれています。最初の公式移住は1797年、大村領の黒崎村、三重村の農民108人が、五島に送られ、11月28日に福江島の六方（奥浦）の浜に上陸し、平蔵（奥浦）、黒蔵（大浜）、楠原（岐宿）などに住みつきました。以降、公式移住は何度かにわたって計画的にすすめられたようです。（1770年代にも、大村領から五島三井楽への２度の非公式移住があったことが知られています。）

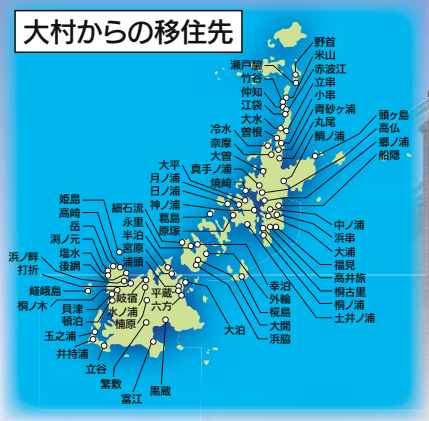
公式移住の他にも、血縁やかつての地縁を頼り、幾度かの機会で私的に潜伏キリシタンたちが、大村領から五島列島に渡ったといわれています。移住先は、北は野崎島から、中通島、奈留島、久賀島、福江島などの大きな島々、さらに頭ヶ島、日の島、折島、嵯峨島、姫島、葛島などの小さな島にわたり、その後も五島内で拡がりを見せました。大村領からの移住は続き、五島藩から1000人の申し込みに対して、最終的に3000人もが移住したともいわれています。大村領外海地区の多くの潜伏キリシタンたちは次第に厳しくなった監視を避け、五島を目指しました。当初「五島へ五島へと皆行きたがる　五島はやさしや土地までも」と謡われましたが、移住した先はほとんどが山間僻地のやせ地や、漁業にも不便な海辺でした。その移住先での過酷な生活により、「五島へ五島へと皆行きたがる　五島極楽来てみて地獄」と俗謡が変化していくのでした。

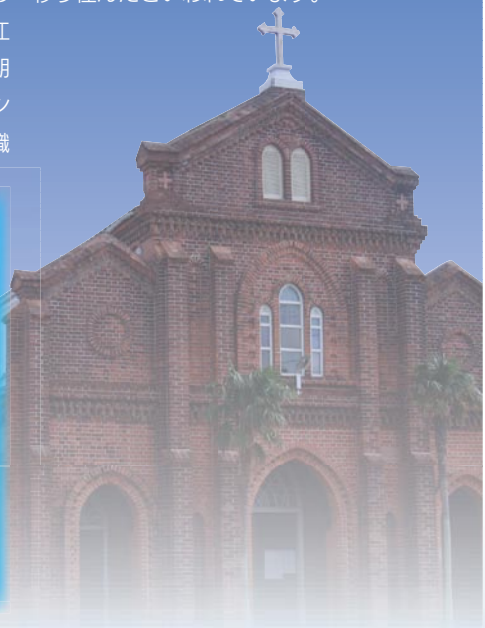
キリシタン用語 **カクレキリシタン** 潜伏キリシタンのうち明治政府によるキリシタン禁制の高札撤去後もカトリック教会に

大村領から五島への農民移住の背景
（潜伏キリシタンの視点から）

1657年には、いわゆる「郡崩れ」とよばれる潜伏キリシタン発覚事件がおこりました。捕らえられた潜伏キリシタン608人は、長崎、大村、平戸、島原などに分けて投獄され、棄教しなかった400人余りは処刑されました。この後、大村城下周辺、内目（内海）と呼ばれた多良見町の伊木力から西海市横瀬浦にかけての大村湾沿岸の潜伏キリシタンはいなくなったといわれています。しかし、西彼杵半島の外海地方、とくに三重村、黒崎村、神浦村にかけては、山に囲まれた急峻地のため大村城下からの交通の便が悪く、監視の目が緩かったといわれ、多くの潜伏キリシタン農民がいました。外目（外海）地域の潜伏キリシタンは、16から17世紀のキリシタン時代には、司牧する神父の数が信徒人口に対して非常に少ないため、神父の巡回する機会が少なく、日常の信仰活動のために信心会（信仰組織）をつくっていました。江戸幕府のキリシタン弾圧の結果、17世紀中期には国内には神父が不在となり、以降、キリシタンは自らこの信心会を基礎とした信仰組織を維持し、潜伏しながら信仰を続けることになったのです。伝説の伝導士バスチャンの教えや「オラショ」（お祈り）、「日繰り」などで教理や教会暦を伝え、信仰生活を維持しました。また「マリア観音」と呼ばれる中国の徳化窯や平戸で作られた白磁の観音像を聖母マリアにみたて聖母への信心を伝えつづけていました。

大村藩では人口制限がなされていたために、潜伏キリシタンの間にも教理に反する「子殺し」が強制されたことが伝えられており、潜伏キリシタンはこれを逃れたく思っていたと考えられています。また子どもを隠し育てても入籍や分家も許可されていませんでした。19世紀になると、キリシタン監視が外海地方でも厳しくなったことが伝わっており、はるか西沖に見える五島列島をあこがれ、次々に移り住んだといわれています。





復帰せず潜伏時代の信仰を継承する者。

【幕末期までの五島の潜伏キリシタン】

五島に移住した潜伏キリシタンたちは、仏教徒を偽装していました。たとえば死者があれば仏僧を招き読経をするが、読経が始まると、長老の数人が隣家で経消しのオラショ（祈り）をしていたといわれています。1644年に最後の宣教師である小西マンショが殉教し、その後は信徒だけが残されました。この状況下で潜伏キリシタン信仰は、日本の民俗信仰と深く結びついて、祖先信仰、儀礼主義的傾向などが強まり、キリスト教伝来から1644年までのいわゆる「キリシタン時代」の信仰形態は変質していました。『五島キリシタン史』（浦川 1973年）でも明治初期ごろ、パリ外国宣教会宣教師から、洗礼の有効性などを確かめられた記録が残っています。

当然、移住元である外海地区と同様に、オラショや教理を子孫に継承する役目の「帳方」、洗礼を授ける「水方」など潜伏キリシタンの組織は各地に整えられていました。このような組織が五島に移住した潜伏キリシタン農民の集落にも、教理、教会暦、信仰具や伝承、役員を中心にキリシタン時代の信心会を基礎とする整然とした秘密の信仰組織が幕末まで継承されてきたのです。

さて、以下では久賀島での五島藩の禁教政策の様相についての記事に触れてみます。五島藩は、社寺を監督する役を設け、宗門改めの時に「絵踏」をおこなうため、定期的に領内を巡回していたことが伝わっています。江戸時代後期には、『役人が出むいて市小木の猿田彦神社で「絵踏」がおこなわれました。潜伏キリシタンたちは踏絵の端につま先だけをつけ、足の裏が絵にかからないよう用心しながら踏んだまねをすると、厳しく監視している役人がこれを見て、キリシタンの足を踏絵にすりつけていました。』このような江戸時代の潜伏キリシタンの苦労話が残っています。絵を踏んだ人々は良心の呵責にかられ、夜は涙を流し、神に赦しを求めたことが伝えられています。禁教時の五島列島各地でも、同じように潜伏キリシタンの信仰を続ける様々な労苦があったと考えられています。

キリシタン用語 **聖人** 殉教したり、信仰と徳に秀で、模範となる信者のうち、教皇により公式に列聖された者。

カクレキリシタン

1.カクレキリシタンとは…

潜伏キリシタンのなかで、1873年以降のカトリック再布教の際に教会に入ることがなく、潜伏期のキリシタン信仰を継承する組織をこう呼びます。

16世紀中期から17世紀前期のキリシタン時代には、司牧する神父の数が信徒人口に対して非常に少ないため、神父の巡回する機会が少なく、日常の信仰活動のために信仰組織（コンフラリアとよばれた信心会）がつくられました。江戸幕府のキリシタン弾圧の結果、17世紀中期には国内には神父が不在となり、以降、キリシタンは自らこの信仰組織を維持し、潜伏しながら信仰を続けることになったのです。カクレキリシタンの方々は、多少変化していますが、このような潜伏キリシタンの信仰組織や信仰形態を現在も守っています。しかしながら、現在、後継者不足のため、多くの信仰組織が解散しており、現存する信仰組織も解散の危機に瀕しています。昭和40年代ごろの五島列島のカクレキリシタン信徒の総人口は15000～20000人程度と推計されています。かつて、福江島でも17もの地域に数多くのクルワ（信仰組織）が存在しました。現在ではほとんどのクルワが解散してしまいましたが、残る方々によって今でも真摯なその信仰は受け継がれています。

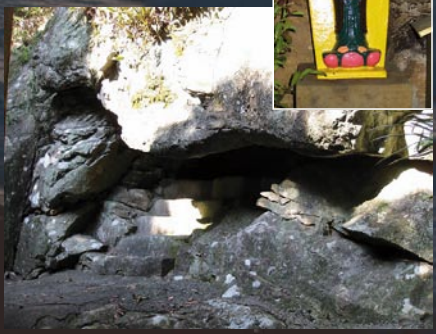
2.聖地について…

（旧奥浦村観音平地区の観音堂および洞窟）

平戸市生月には殉教地を中心に、様々なカクレキリシタンの方々が崇敬する聖地があります。長崎市外海黒崎地区の市指定文化財枯松神社や新上五島町の桐古里の山神神社などのカクレキリシタンの神々を祀るカクレキリシタン神社とよばれる聖地があります。

観音平では大村領から潜伏キリシタンが移住した直後の1816年に建立された洞窟の中にある観音像を中心に、20年ほど前までカクレキリシタンの信仰活動がおこなわれていました。現在も地区住民の信仰対象、そしてその他の人々の民俗信仰の施設でもあります。潜伏キリシタンの時代からカクレキリシタンの信仰活動をおこなった地としての聖地性をもちます。その他、五島の福江島にはいくつかのカクレキリシタンの聖地が存在します。

観音平の観音▶



観音平の観音のある洞窟

明治から現代へ

大浦天主堂

【キリシタン復活】

７代250年にわたって潜伏し続けたキリシタンは、ローマから遣わされる神父がいつかきっと聖母マリアの導きによって日本に来られる日を心ひそかに期待していました。

「沖に見えるはパーパの舟よ、丸にやの字の帆が見える。」

五島の潜伏キリシタンにはこのような歌が言い伝えられたといわれています。丸にやの字とは聖母マリアのことです。

1853年ペリーが浦賀に来航したのをきっかけとして、幕府による200年以上続いた鎖国政策は終わりを遂げ、日本は開国を迎えます。1858年、ヨーロッパ諸国との通商条約に基づいて絵踏が廃止され、外国居留民のために教会の設立が認められ、1862年、横浜天主堂の建立に次いで、1865年長崎の大浦にもフランス居留民のために、パリ外国人宣教会の神父たちが司牧に入ります。

【信徒発見の奇跡】

フューレ神父によって大浦の地に天主堂の建築が始められ、1865年2月19日に大浦天主堂の献堂式がおこなわれました。同1865年3月17日浦上の潜伏キリシタン十数名がこの教会堂を訪れプチジャン神父に「ワタシノムネ、アナタノムネトオナジ」「サンタマリアノゴゾウハドコ？」と声をかけその信仰を告白しました。これは「信徒発見」と呼ばれ、日本での長い禁教政策の下、神父不在の状況の中でその信仰を守り抜いた奇跡として、世界中にそのニュースは駆け巡りました。

神父再来の報が各地の潜伏キリシタンに伝わり、ガスパル与作（後の伝道士下村鉄之助）が同年プチジャン神父に逢い、五島の各地に神父再来が伝えられました。すると嵯峨島、福江島、久賀島、若松島、有福島、中通島の潜伏キリシタンの役員が次々に大浦へ、受洗や教理学習に向かいました。1867年には、伝道士ドミンゴ森松次郎が秘密裏にクーザン神父を招き、頭ヶ島で五島での信徒復活後最初のミサがおこなわれます。

キリシタン用語 **洗礼** キリスト教徒になるための儀式で、水の注ぎを受けることで、罪を清め新しい命を与えられるとされる。

久賀の牢屋の跡

楠原の牢屋

【復活後の迫害（崩れ）】

こうして、一旦は復活を遂げたキリシタンですが、この後も1867年「浦上四番崩れ」と呼ばれるキリシタン検挙事件が起こり、捕らえられた信徒たちは総流罪となりました。五島でも五島崩れと呼ばれる下級役人が中心におこなった、キリシタンを棄教させるために厳しい拷問や捕縛・入牢させる迫害事件が起こります。久賀島の牢屋の窄事件にはじまったとされ、1873年の高札撤去まで福江奥浦、岐宿水ノ浦と楠原、姫島、三井楽岳、富江山ノ田、葛島、有福島、中通島桐古里、宿ノ浦、福見、頭ヶ島、鯛ノ浦、青砂ヶ浦、冷水、曾根、江袋、仲知、野崎島などに広がっていきます。

【牢屋の窄事件】

1868年棄教を拒んだ久賀島のキリシタン農民約200人が役人によって捕縛され、そのうち主立った者22人が福江に送られました。彼らは三尾野の庄屋宅で10日以上も拷問を受けました。その間久賀島でも苛烈な拷問が続きました。福江に送られた22人も、その後、久賀島猿浦に設けられた牢に送られ、わずか6坪の土間に200人ほどが閉じ込められました。牢は不衛生で人も密集し、食事もサツマイモを少々のみで、人々の体力は衰弱していました。このような中でも信仰心は揺るがず、キリシタンの人々は堪え忍びました。このような状態が8ヵ月も続き、牢内の死者は、体力のない高齢者や乳幼児が多く39人にも達しました。出牢直後の死者を合わせると42人になります。

キリシタン信仰だけの理由で、このような非道をおこなったことに対し、フランス公使ウートレーやイギリス公使パークスなどが明治政府に幾度も抗議しました。抗議を受け、ようやく拷問が中止され中心人物を除いて出牢を許されたのです。その後も一部、指導的な役割のキリシタンが2年間も入牢させられました。1870年、上五島の鯛ノ浦でも郷士が刀の試し斬りとして、無抵抗のキリシタン6人を殺害する殉教事件が起こりました。同年に派遣された岩倉具視を代表とする欧米との不平等条約の改正に向かった明治政府使節団にとって、国内のキリスト教徒への弾圧は大きな障害となっていました。ようやく、1873年政府はキリシタン禁制の高札が撤去し、信仰が黙認されるようになったのです。

【カトリック再布教から現代へ】

五島崩れの迫害が下火になると、姫島の清川澤二郎などの伝道士の尽力と元の潜伏キリシタン代表者らの連携により密かに潜伏キリシタンへの洗礼や教理教育が進められていきます。

1873年2月、キリシタン禁制の高札が撤去され、信仰が黙認されることになると、澤二郎らがパリ外国宣教会フレノ神父を長崎へ迎えに行き、ついに念願の神父来島が叶います。フレノ神父の堂崎での野外ミサには、1000人を超える下五島各地のカトリック信徒が船で集まったといわれています。以降、宣教師と伝道士らの協力によって、潜伏キリシタンのカトリックへの復帰が進められていくのです。

1877年からフレノ神父やマルマン神父たちは長崎から五島列島の巡回司牧に訪れます。1880年からは五島列島を２地区に分け、下五島をマルマン神父、上五島をブレル神父が担当し、常駐して巡回司牧に努めます。1888年堂崎に着任したペルー神父は、1893年から五島の主管者（司教代理）に任命され、全五島を巡回して司牧宣教に尽くします。このころから、1879年の大泊教会の仮御堂にはじまり、1880年堂崎に小聖堂（現教会は1907年建立され県指定有形文化財）、1881年には浜脇教会（現在旧五輪教会堂として1931年に移築され国指定重要文化財）、1906年江上天主堂（現教会は1918年に建立され国指定重要文化財）、上五島地区では1878年青砂ヶ浦教会（現教会は1910年に建立され国指定重要文化財）、1882年江袋教会（現教会は火災による焼損を2010年、創建時の姿に復元修復され県指定有形文化財）、1887年頭ヶ島教会（現教会は1917年に建立され国指定重要文化財）など、その他各集落に教会堂は建設されていき、潜伏キリシタンのひそかな祈りから、カトリック復帰によって、祈りが目に見えるものになっていきます。その前後で、日本は数々の戦争を経験し大変な時代ですが、教会を建造するために、生活の厳しい中でも、信者によって多くの献金が集まりました。さらに、宣教師の本国の私財や外国の信仰を同じくする方々からの善意の寄付が集まってきました。宣教師の設計や指導の下、信者の労働奉仕や鉄川与助など日本人大工の施工によって多くの教

キリシタン用語 **洗礼名** 霊名、クリスチャンネームとも呼ばれ、洗礼の際に授けられる名前。

頭ヶ島教会

青砂ヶ浦教会

水ノ浦教会

教会堂建設の匠 鉄川与助

1879年、現在の新上五島町丸尾郷で代々大工の棟梁の家柄にあった鉄川与四郎の長男として生まれる。鉄川は尋常小学校を出ただけで大学などの専門教育は受けておらず、ペルー神父やド・ロ神父等、宣教師から教会建築の知識と技術を身につけ、独学と創意工夫で長崎県を中心に50以上の教会堂建設にかかわり、30以上の教会堂を設計・施工していきました。彼が手がけた教会群は、総木造から煉瓦造、石造、鉄筋コンクリート造と多岐にわたり、西洋と日本の建築技術が融合していく過程を示す貴重な建築物であり、日本近代建築史において高い評価を得ています。五島列島では江上、水ノ浦、楠原、堂崎、冷水、野首、青砂ヶ浦、頭ヶ島、旧鯛ノ浦の教会堂に携わったとされています。

会が建てられていくのです。

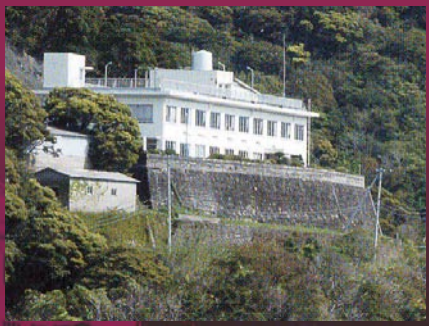
五島全域に現在50、下五島には21の教会があります。過疎化の進む下五島にも、かつて28の教会がありました。五島のカトリック信徒の人口は、2013年には8,995人で、五島総人口の約14%を占め、その中で五島市には3,275人と、五島市の総人口の8.3%を占めます。ちなみに日本全国でのカトリック信徒の人口割合は0.3%です。データのように五島列島は、日本の中でもカトリック信徒人口割合が最も高い地域です。このように、五島列島には、250年にも及ぶ禁教での迫害の歴史をこえ、真摯に信仰を伝え続けたキリシタンの歴史が最も深く刻まれています。現代においても真摯な信仰が伝えられ、世界で唯一無二となる歴史を刻み続けているのです。

堂崎［その歴史と神父たちが残した福祉の足跡］

堂崎は禁教の高札撤去の後、パリ外国宣教会フレノ神父が、下五島での最初の巡回した地であるといわれています。1880年にマルマン神父によって、最初の小聖堂が建設され、主任司祭が常駐する五島初の主任座教会となりました。

同時に宣教師たちは福祉事業にも着手します。当時の五島は非常に貧しく、子供の「間引き」が行われていました。それを見かねたマルマン神父はそのような子どもたちの救済に乗り出したのです。1880年神父は大泊の一民家とカトリックの家族の娘たちの力を借り「子部屋」と呼ばれる養護施設（日本での最早期の児童福祉施設）を作りました。1883年、収容された子どもたちの増加により堂崎へ移り「養育院」と呼ばれるようになります。1888年、ペルー神父が着任すると、1901年には正式な教会の建築計画に着手。これに伴って養育院の移転が必要となり、赤瀬に山林を求めて開拓し、1904年に新養育院が完成し移転します。その後建設用地を拡充整備して聖堂の建築に着手し、1908年に堂崎教会（現在県指定文化財建造物）は完成、同年５月に祝別献堂されました。堂崎は名実ともに五島の司牧宣教の中心地となります。1909年、養育院は財団法人の認可を受け、「奥浦慈恵院」となります。1914年、「奥浦村堂崎公教伝道者養成所」が信徒の要理教育と教会に奉仕する者を養成するために設けられました。また1948年、奥浦慈恵院は児童福祉施設として認可されます。その福祉事業を支えた女性たちの行為から、不幸な子たちや困窮した人たちを通して神に仕える使命に対する徹底した精神を知ることができます。

このように堂崎の地には、現教会が建設される前の明治初期から多くの布教施設および福祉施設が建てられていました。日本のキリスト教史において、五島列島という信徒数の多い離島を舞台に、カトリック復活期の布教システムで大きな役割を果たしたこの地には、信仰の歴史を刻んできた価値があるのです。



旧児童養護施設奥浦慈恵院

キリシタン用語 **パードレ** 神父や司祭のことで、キリスト教伝来の頃これに「伴天連」と字を当てられた。

五島を世界遺産の島に！

「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」は平成27年1月ユネスコの世界遺産センターに推薦書（正式版）が提出されました。

五島市は現在長崎県及び長崎市、佐世保市、平戸市、南島原市、小値賀町、新上五島町、熊本県天草市と力を合わせて、「世界遺産」登録を目指しています。五島市にある構成資産は旧五輪教会堂、江上天主堂の2つの国指定重要文化財です。

旧五輪教会堂

旧五輪教会堂は1881年に建てられた浜脇教会を解体し、1931年に久賀島の五輪地区に移築されます。以後50年間、五輪地区と蕨小島の信徒たちの信仰のよりどころでしたが、老朽化のため、解体して新教会を建設する話が持ち上がります。しかし、“貴重な文化財として、価値ある建造物を守ろう”との関係者の熱意と地元信徒たちの協力によって解体の危機を乗り越え、その後の県の現地調査の末、1985年に県指定有形文化財となり、当初の姿のまま保存されることになりました。建物は福江市（現五島市）に寄贈され、1999年5月13日には国の重要文化財に指定されました。

外観は素朴な和風建築でありながら、内部は三廊式、ゴシックの木造リブ・ヴォールト天井からなります。明治初期の教会建築史を物語る貴重な建造物です。

江上天主堂

江上天主堂は奈留島西部の海岸沿いにあり、廃校となった小学校脇の林にひっそりと建っています。1881年3月に潜伏キリシタンの4家族が洗礼を受けたことにはじまります。かれらの先祖は、江戸時代末期に大村領外海地区から移住してきました。ここに教会がまだなかったころ、ミサは信徒の家でおこなわれていましたが、1906年、現在地に簡素な教会が建てられました。本格的な教会が建築着工されたのは、1917年でした。当時の信徒は40～50戸でしたが、五島の各地で教会を建設施工をしていた鉄川与助に建設を依頼しました。建築資金はすべて、キビナゴの地引網で得た収入などを出しあい、翌1918年3月に完成させました。その内部は中間に疑似的な三層構成半円形アーチのリブ・ヴォールト天井をもち、ゴシック・リヴァイヴァルの継承に属し造形に優れているとされます。その造形性と保存状態の良さも評価され2002年2月に県の有形文化財になり、2008年6月9日には国の重要文化財に指定されています。

2015年（平成27年）2月現在

関連年表

西暦	世界での出来事	日本での出来事	長崎での出来事	五島での出来事
1450	金属活版印刷術の発明			
1467		応仁の乱		
1488	ディアスが喜望峰に到達			
1492	コロンブスが西インド諸島に到着			
1498	バスコ・ダ・ガマがインドのカルカットに到達			
1510	ポルトガルがインドのゴア占領			
1519	マゼラン世界周航へ			
1526				第17代領主宇久盛定江川城を築く
1542	フランシスコ・ザビエルゴアへ到着			
1543		ポルトガル船が種子島に漂着（鉄砲伝来）		
1549		フランシスコ・ザビエル鹿児島へ上陸（キリスト教伝来）		宇久純定第18代領主となる
1550			フランシスコ・ザビエル平戸で布教開始	
1562				純定は病気に伏し、横瀬浦のイエズス会に医師の派遣を乞う。トーレス神父はディエゴを送って治療する 純定宣教師の派遣を要請
1563			大村純忠横瀬浦にて洗礼を受ける（日本初のキリシタン大名の誕生）	
1566				アルメイダとロレンソの五島における布教が始まる 奥浦に最初の教会が建つ 7月：アルメイダ、五島を去る 12月：アルメイダに代わりモンテ神父五島へ
1567				宇久純尭が洗礼を受ける 家臣や領民も洗礼を受ける
1569		織田信長、宣教師ルイス・フロイスに布教許可状を与える	長崎初の教会、トードス・オス・サントス教会献堂	
1571			長崎を開港	宇久純尭が第19代領主となり、キリシタン大名となる
1573		室町幕府滅亡		
1579				純尭の病死、後の第20代領主純玄がキリスト教の迫害を開始

キリシタン用語 **ミサ** キリストの最後の晩餐と十字架上の死を再現し、その復活を記念するために毎週日曜日に集まり行われ

西暦	世界での出来事	日本での出来事	長崎での出来事	五島での出来事
1580			有馬晴信洗礼を受ける 有馬にセミナリヨ開校 大村純忠が長崎と茂木をイエズス会に寄進	
1582	教皇グレゴリウス13世、新暦を公布	6月：本能寺の変　織田信長死去	2月：天正遣欧少年使節の派遣 大村藩領内の信者は6万人に増え、多くの教会が建てられる	
1584			有馬晴信が浦上村をイエズス会に寄進	
1586				純玄第20代領主となる
1587		豊臣秀吉がキリスト教布教禁止、宣教師の追放令を発布		
1588			豊臣秀吉、長崎・茂木・浦上を直轄地とする	
1590			天正遣欧少年使節、帰国	
1592				宇久姓を五島姓に改める
1594				領主純玄朝鮮出兵で出陣して病没 玄雅第21代領主となる
1597			ヨハネ五島たち26人が、長崎の西坂の丘で殉教（日本二十六聖人の殉教）	
1600		関ヶ原の戦い		
1603		徳川家康、江戸幕府を開く		
1605			大村領長崎村が天領となる	
1607				五島玄雅城下に教会建設を許可
1612		幕府、天領に禁教令布告、京都の教会を破壊		玄雅死去。盛利第22代領主となる
1614		大阪冬の陣 幕府、全国禁教令布告	長崎の教会が破壊され宣教師らを追放	盛利は領内のキリシタンを追放 江川城焼失
1622			元和の大殉教	
1628				8月：キリシタン入島禁止の制札
1637			島原・天草の乱勃発	
1644			国内最後の神父殉教（小西マンショ）	
1657			大村で郡崩れ	
1772				大村藩農民が五島の三井楽・淵ノ元へ最初の移住

る祭儀。

西暦	世界での出来事	日本での出来事	長崎での出来事	五島での出来事
1776	アメリカ独立宣言			
1790			浦上一番崩れ	
1796				第28代領主五島盛運、大村藩に農民移入を請い、千人の農民を移住させる約束が成立
1797				大村藩農民第一回公式移住108人、六方の浜に上陸し平蔵、黒蔵、楠原などに入植
1839			浦上二番崩れ	
1853		ペリーの来航		
1856			浦上三番崩れ	
1858		日米修好通商条約 外国人居留地での教会堂建築の許可		
1861	アメリカ南北戦争			
1862	教皇ピオ九世により日本の26殉教者は聖人の位に列聖される	横浜天主堂の献堂		
1863				福江城完成
1864			11月末：大浦天主堂竣完成	
1865			2月：大浦天主堂献堂式 大浦天主堂を創建したプチジャン神父が訪ねてきた浦上のキリシタンを発見（信徒発見）	若松村のガスパル与作がプチジャン神父を訪ね1866年2月5日、復活後最初の聖体拝領者のひとりとなる
1867			浦上四番崩れ	2月：クーザン神父（3代目長崎司教）来島、（復活後五島で初めてのミサ）
1868		明治維新 政府が五傍の立札を掲示しキリシタンを禁止		久賀島から五島崩れがはじまる、久賀島では200余名が監禁され、42名が殉教した
1870				鯛ノ浦6人斬り事件
1871		岩倉使節団、欧米諸国の視察に出発		
1873		岩倉使節団、帰国 キリシタン禁制の高札撤去		フレノ神父来島し、堂崎の浜でクリスマスミサを司式
1877				フレノ神父、マルマン神父たちは定期的に長崎から五島列島を巡回司牧

キリシタン用語 **殉教** 自らの信仰のために迫害を受けて死ぬこと。

西暦	世界での出来事	日本での出来事	長崎での出来事	五島での出来事
1879				大泊に仮聖堂を設ける 水ノ浦教会建立(現教会は1938年建立)
1880				マルマン神父が下五島の担当司祭として着任 堂崎に小聖堂を設けて主任座教会とする マルマン神父が大泊に子部屋(養護施設奥浦慈恵院の前身)を設け、子どもの養育をはじめる 立谷教会建立 三井楽教会建立(現教会は1971年建立) ブレル神父が上五島に着任し、鯛之浦を拠点に司牧活動
1881				大泊教会建立 浜脇教会(後に五輪へ移築され旧五輪教会堂)建立
1882				堂崎教会建立(現教会は1908年祝別献堂)
1885				宮原教会建立(現教会は1971年建立)
1888				ペルー神父堂崎小教区第2代主任司祭として着任 浦頭教会建立(現教会は1968年建立)
1889		大日本帝国憲法発布(信仰の自由を明文化)		
1893				ペルー神父、五島の主管者(司教代理)に任命される
1894	日清戦争			
1897				井持浦教会祝別献堂(現教会は1988年建立)
1899				井持浦に日本初のルルド創設
1904	日露戦争			
1906				江上天主堂建立(現教会は1918年建立)
1908				堂崎天主堂祝別献堂(現教会)
1912				楠原教会建立

西暦	世界での出来事	日本での出来事	長崎での出来事	五島での出来事
1914	第一次世界大戦			奥浦村堂崎公教伝道者養成所開設 福江教会建立（現教会は1962年建立） 福江小教区設立
1915			浦上天主堂建立	
1918				嵯峨島教会建立
1919				繁敷教会建立（現教会は1974年建立）
1922				半泊教会建立
1924				貝津教会建立（現教会は1962年建立）
1926				奈留教会建立（現教会は1961年建立）
1927			早坂久之助神父長崎司教に任命される（日本人初の司教）	南越教会建立（現教会は1957年建立）
1931				浜脇教会改築 5月祝別献堂式 旧浜脇教会堂は五輪に移築、五輪教会として献堂（1932年）される
1933			大浦天主堂、国宝に指定される	
1935				打折教会建立（現教会は1973年建立）
1939	第二次世界大戦勃発			
1945		広島・長崎に原爆投下、終戦	原爆投下により浦上天主堂崩壊（現教会は1959年再建）	
1962			日本二十六聖人記念碑、記念館建立	玉之浦教会建立
1969				牢屋の窄殉教記念教会建立（現教会は1984年建立）
1981		教皇ヨハネ・パウロ2世来日	教皇ヨハネ・パウロ2世、長崎で57,000人のミサを司式	
1985				（新）五輪教会建立
1999				旧五輪教会堂、国重要文化財に指定
2006				奥浦慈恵院が浦頭に移転
2007			1月：「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」がユネスコの世界遺産暫定リストに登録	
2008		ペトロ岐部と187殉教者列福式挙行（於長崎市）		江上天主堂、国重要文化財に指定

キリシタン用語 絵踏 江戸幕府が禁教当時、キリスト教の信者を棄教させ、発見するために聖画や銅製のクルスやメダイ等を

西暦	世界での出来事	日本での出来事	長崎での出来事	五島での出来事
2015			信徒発見150周年 1月：国から「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の推薦書（正式版）がユネスコ世界遺産センターへ提出	

参考文献

岩永静雄（編）（1983）『出津教会誌』出津カトリック教会／内海紀雄（1985）『五島久賀島年代記』私家版／浦川和三郎（1926）『切支丹の復活　前編』日本カトリック刊行会／浦川和三郎（1943）『浦上切支丹史』全国書房／浦川和三郎（1973）『五島キリシタン史』国書刊行会／奥浦慈恵院（1980）『奥浦慈恵院創立100周年誌』奥浦慈恵院／カトリック長崎大司教区（1965）『100年のあゆみ』カトリック長崎大司教区／カクレキリシタン習俗調査委員会（2000）『長崎県のカクレキリシタン』長崎県教育委員会／片岡弥吉（1989）『長崎のキリシタン』聖母文庫／片岡弥吉（1967）『かくれキリシタン』NHKブックス／クラッセ（太政官翻訳）（1924）『日本西教史　上下巻』太陽堂書店／五島市（編）（2011）『五島市久賀島の文化的景観の保存計画』五島市／五島市世界遺産登録推進協議会（2011）『五島市教会めぐりハンドブック』五島市／福江市・長崎県『発掘調査報告書　大浜遺跡』／木場田直（1991）『血と涙と信仰の島　五島列島その昔』私家版／外海町（1983）『外海－キリシタンの里』外海町／堂崎天主堂百周年記念事業実行委員会（2008）『堂崎天主堂献堂百周年記念誌』堂崎キリシタン資料研究会／長崎巡礼センター・長崎文献社（編）（2008）『ザビエルと歩くながさき巡礼』長崎文献社／中田秀和（1981）『隠れキリシタンから司祭に』中央出版社／久賀島近代キリスト教墓碑調査団（2007）『復活の島』長崎文献社／福江市史編纂委員会（1996）『福江市史　上巻』福江市／古野清人（1966）『隠れキリシタン』至文堂／丸尾武雄（2001）『神の恩恵に支えられた先祖の旅路』私家版／峰徳義（編）（1969）『信仰の碑』久賀島教会／林一馬（2002）『長崎の教会堂　聖なる文化遺産への誘い』九州労金長崎県本部／長崎県教育委員会（1988）　『長崎のキリシタン学校－セミナリヨ、コレジヨを訪ねて－』／株式会社長崎文献社（2006）『旅する長崎学1キリシタン文化Ⅰ長崎で「ザビエル」を探す』／株式会社長崎文献社（2010）『旅する長崎学13　海の道Ⅲ五島列島　海原のジャンクション癒しの島をめぐる』／株式会社長崎文献社（2012）『「日本二十六聖人記念館」の祈り』〈長崎游学マップ8〉／小坂井澄（1980）『お告げのマリア』株式会社集英社／中島功（1973）『五島編年史』国書刊行会／フランシスク・マルナス（久野桂一郎訳）（1985）『日本キリスト教復活史』みすず書房／レオン・パジェス（クリセル神父校閲　吉田小五郎訳）（1938）『日本切支丹宗門史　上・中巻』岩波文庫／浦頭カトリック教会（1994）『浦頭小教区史』浦頭カトリック教会／清水紘一（1981）『キリシタン禁制史』教育社歴史新書／カトリック長崎大司教区長崎地区カテキスタ養成委員会（1998）「まるちれす指導書　子どものための教会史・長崎」サンパウロ／［新聞資料］カトリック教報（関係年発行分）／下口勲（2013）『復活の使徒』

踏ませた行為を指す。

五島キリシタン史

協力／加藤久雄（長崎ウエスレヤン大学）

発行／五島市世界遺産登録推進協議会

〒853-8501長崎県五島市福江町1番1号（五島市役所市長公室）
TEL 0959-72-6111　FAX 0959-74-1994

発行日／2013年3月（初版）　2015年2月（2刷）